

## 〔 編集後記 〕

本号では原著論文1編，症例報告3編，学会記録1編がいずれも外科の先生方の投稿によるものでした。最初の3編は沼津市立病院の方が筆頭著者ですし，学会記録を見ましても，多くの関連病院の方の演題が掲載されており，いずれも興味深い内容です。よく「大学病院及びその関連病院」と一括りで記載されますが，多くの関連病院が臨床のルーチンをこなすだけでなく，常に科学者の目で臨床現場の事象を観察し，論文としてあるいは演題としてまとめていっていることが伺われます。このように個々の関連病院が高いレベルの質を維持してきたことが，千葉大学の臨床がグループとしてわが国の医療を今日までの長い間，先頭に立って牽引してきた所以なのだと再認識しました。

とはいえ，小児科の一部しか知らない私にとって，佐塚先生の原著「腹腔鏡を用いた安全な人工肛門閉鎖術の考案」を理解するのは基礎知識がないために結構な時間がかかりました。そもそもどうして低位の直腸癌の手術にかけ離れた回腸を使った人工肛門を作らなければならないのか？など，専門科からすれば笑われそうな疑問が次々に出てきました。その度にネットなどで術式を調べ，ようやくおぼろげながらではありますが理解することができました。最初は何が写っているのかわからなかった腹腔内の腸の写真の理解が進み，最近では「自動縫合器」というものを使うらしい，など大げさかもしれませんが新しい事を知る喜びを感じました。折から最近，マスコミが某大学の腹腔鏡手術で考えられないほど立て続けに手術をされた患者さんが亡くなったと大々的に報道し，日本肝胆膵外科学会理事長として宮崎教授がコメントを述べられている場面を何度も目にしました。低侵襲性でありメリットの大きな腹腔鏡手術も，きちんとしたトレーニングと弛まない改良があってこそ医療として成り立つのだという基本に立つことがこの様な，決して起こしてはならない事件を防ぐことになるのだと思います。その他，高度肥満で手術のリスクが高いため，まず減量したら肝細胞が自然退縮したという菅本先生の症例報告，再び佐塚先生の腎癌の術後9年もたつて多発肺転移を来した症例の手術報告，水藤先

生の外傷により膵の仮性嚢胞ができ，食道狭窄まで起こしたが自然軽快した症例報告など専門外ではありながら，あるいは専門外であるからこそかもしませんが，興味が尽きません。

エッセイとして，千葉大出身ではない私でもそのお名前を良く存じ上げている小俣政男先生が書かれた，これも伝説的な白壁彦夫教授とラジオ波焼灼療法を開発された椎名秀一郎教授に関する軽妙洒落な筆致で書かれた味のある文章も興味深く読ませていただきました。

赤木先生のサンディエゴ留学記を読みながら，La Jollaの素晴らしい海岸線を思い出し，私も留学していたSalt Lake Cityから何度も足を延ばしたグランドキャニオンをはじめとする国立公園での思い出も共有しました。

打って変わって関根郁夫先生の様々な観点からの「連載」が続いています。今回は「出来る内科医とは一分野別内科学」というタイトルで，診断学について縦横無尽に意見を述べられ，これからの若い医師たちにとっても大いに啓発になる内容でした。

最後の原口先生による英文原著は，わが国の労働衛生の最大の課題といっても良いと思われるメンタルヘルスに取り組んだ研究です。具体的には「うつ病によって休職した後に復職した患者さん」にとって復職を成功させる要因は何かを，患者さんを対象とした調査で明らかにしようという意欲的なものです。復職成功の要因として，意外な事に「抑うつ症状の改善」よりも「仕事の量と時間の段階的增加」がはるかに重要な要因である，との結論を導き出しています。パイロット研究ということなので，さらに症例を積み上げて，是非，今後この課題に対して結論を出して欲しいところです。

正直なところを申し上げますと，これまで，面白そうな記事のみを拾い読みで済ませておりましたが，これほど含蓄のある多様な論文があることに編集委員の一員でありながら初めて気づいたというのが事実であります。今後も，読み応えのある雑誌づくりに貢献していきたいと思っております。

（編集委員 羽田 明）